

新しい生き物や未開の地を求めて 行ってみたいと思った事ある？

まだダイバーが足を踏み入れてない聖地。

「ダメージ」という言葉が似合わない珊瑚礁。

リッチな栄養分の海に生きる珍しい生き物たち。

こういう所、実際にあるんだ。

時差無く行けるトロピカルアイランドで

日本人ダイバーには知られていない特別な場所。

……それは、インドネシアのアンボン島。

UNUSUAL UNSPOILED UNBELIEVABLE AMBON

Photo : Tony Wu
Text : Tony Wu & Emiko Miyazaki
Special thanks : World Tour Planners, Maluku Divers
Design : Maya



30cm 大のオオモンイザリウオ。他にも3匹いた。海の栄養分が豊富なのを物語っている。

A ア M ん B ボ O ん N

Web-lue 2009. Winter





高台から見る夕焼けは、一日の疲れを癒してくれる

マグロを薫製してお店の前に
どンドン集って来る子供達。



01



02



03



04

03/ 交通手段の1つ。乗ってみたが、
運転手によってスピードが違う。

04/カメラを向けると、格好つけてボー
ズする学校帰りの生徒。

01/ スパイスアイランドと呼ばれるだけ
あって、市場では香辛料の種類が
いっぱい。

02/ 何故か僕を見て笑う女性たち。
ナッツをくれた。

アドベンチャーアイランド“アンボン”

南の島に足を踏み入るとまず肌で感じるのは、トロピカル特有のあったかい空気と木々や花々の匂い。上を見上げると、青い空にポコポコとした真っ白い雲がゆっくり流れる。太陽がゆったりと動くうねりを照らし、まばゆいばかりに輝いている。何気ないこの空間を見ながら過ごすって意外に贅沢な事なのかもしれない。

ダイビングボートから、村の子供達が浜で遊んでいるのが見えた。浜で転がって顔いっぱい砂を付けながら笑っている子供たち、水飛沫あげながらはしゃいでる子供たち。我々のボートに気付いて無邪気に手を振って来た。自然に僕も手を振った。浜で遊ぶ子供たちの背後に広がる深い森林がそびえ立つ。恐らく誰も手を加えてない自

然の姿がそこにあった。ボートに乗って間もなく着いた目的地。ファーストダイブは、機材などを念入りにチェックしたりで少々緊張する。しかし、水中に入った瞬間、そんな緊張はすぐにほぐれた。アンボンを囲むバンダ海がこれから広がる水中世界を見せてくれた。

“アンボン”ってどんなところ？

もし、新人ダイバーやアジアにまだ滞りに行った事がなかったら、たぶん“アンボン”と聞いてもピンと来ないと思う。

1990年代の終わり、東南アジア全域で政治的、社会的、また宗教的問題が勃発し、アンボンもその影響を受けてしまった。アンボンは、日本を含む世界中のダイバーが集まるダイビングメッカだっただけに、残念な事に観光客が遠のいてしまった。

Good News! ここ数年前から情勢は安定し、街は以前の様な活気が戻って来た。市場には様々な食材が並び、あちこちで笑顔が溢れていた。いくつか建物が崩壊された傷跡が残っていたが、復興まで時間の問題であろう。気になるダイビングだが、街の復興の様には早くはないが、徐々にダイバーが各国から再び集まり始めている。クルーズ船がダイビングサイトをまわるスタイルが主

流だが、最近は現地にダイビングリゾートが出来たので便利になった。ダイバーにとって、一筋の幸運の光が差し込んで来たと言っても大げさじゃない。だって、この海はスゴイからだ。以前、ダイバーが集っていたアンボンには、それなりの理由がある。もし、南国の混み合わない海の中で、レアもの揃いの生き物をゆっくり見たいと思ったら、次のデスティネーションを“アンボン”にしてみてもどうだろうか？

新イザリウオ*発見!

僕は、イザリウオの大ファンだ。周りから変だと思われるけど仕方ない。あの可愛いとは言えない顔、シェーブアップされたとは言えないボディ、可憐とは言えない動き、でも、憎めない愛嬌あるヤツだと思う。あまり動かないこの生き物は、よくダイバーの被写体にされる。今回のアンボンの目的は、マルク・フロッグフィッシュを一度見てみたいと思ったからだ。

2008年始め、マルクダイバーズのあるガイドが、普段と違ったイザリウオの種類を見つけた。平均的な大きさ(体長10cmぐらい)だが、体はユニークなストライプ模様、エスカが無く、また、小さな青い目が前方に付いている。新種ではないだろうか?との疑問も、後のDNA検査で新種と判明された。これは見る価値ありだ。

イザリウオ自体、じっとしてる事が多いので見つけに

くい。果たして、マルク・フロッグフィッシュを見つげられるだろうか?

期待と不安が交互に押寄せていた。まだ、マルク・フロッグフィッシュに関する情報が少ないので、暫くは運任せとなる事を念頭に入れておいた。

僕がアンボンを訪れたのは、ダイビングのシーズンが始まる10月上旬。シーズン前は雨期なので、誰も海に入っていない。つまり、マルク・フロッグフィッシュがどこに生息しているか等の情報は全く無いという環境だった。僕はラッキーだった。数日間で、ガイドがやっと一匹見つけてくれた。じっと観察。そして撮影に成功した。この海は面白い生き物がいるもんだ。

マルク・フロッグ フィッシュを求めて

なんでもない場所に見えるが、よく見ると浅瀬にこんなに面白い生き物がいた。

A ア M M B B O O N N
アンボン





MOVIE LINK <http://www.web-lue.com/blog/categorise/tony-wu/000740.html>

(上) やっと見つけた時、こんなへんでこなイザリウオを見た事なかったので「スゲー」の一言。

(右) 泳いでる姿。泳ぎ方にパターンがあって、この時は殆ど体を動かさずに移動してた。



EXTRA SECTION 1

マルク・フロッグフィッシュのこと

マルク・フロッグフィッシュの謎

現段階でマルク・フロッグフィッシュは、湾内のある一部の浅瀬で確認されている。僕が出会った時は水深2.5m以下と浅かったので、うねりや浮遊物などが邪魔して撮影に苦労した。

他のイザリウオと同様あまり動かない生き物だが、一度泳ぎだすとこれが意外に早いので驚いた。

興味を惹いたのは、同行者がビデオで撮ったうつぶがマルク・フロッグフィッシュを襲うが失敗したシーン。もしかして、マルク・フロッグフィッシュは、自己防御用に毒を持っているのではないかと考えた。しかし、現在の調査報告に、イザリウオが自己防御する構造を持っているとは確認されていない。

もし、アンボンでマルク・フロッグフィッシュを狙いたいと思ったら、これだけは理解してほしい。現在までに数匹の個体は確認したが、どの辺によく居て、どの深さによく居るのかまだ情報が乏しいのだ。もしかして、外洋にも生息しているかも知れない。深海から時折上がってくるのかも知れない。これらを含めた情報収集には多少の時間がかかりそうだ。

※何故「イザリウオ」を使うか？

近年、アメリカから始まったポリティカル・コレクトネス（英: political correctness、PC）が日本にも影響して来た。

誰が決めたのだろうか。差別や偏見だと言葉が変化している今日。何気なく言った魚名まで変わってきている。例えば、「イザリウオ」がその1つだ。「いざる」＝「足が不自由であるけない人」という意味があるから、「カエルアンコウウオ」と改名されたい。魚に対して差別や偏見なんて全く無い。ハンディーを持つ人に対して偏見を持ってる意味でもない。だったら言葉を変える必要がない。

英語でも日本語でも、ポリティカル・コレクトネスは行き過ぎていると思うから僕は元の言葉を使っている。(Tony Wu)

ポリティカル・コレクトネス

……<http://ja.wikipedia.org/wiki/ポリティカル・コレクトネス>

このウミウシ (*Nembrotha lineolata*)
はホヤを食べていた。

アンボンの海は スゴい。

ハウスリーフでこの様なウミウシ
(*Chromodoris dianae*) があちこち
で見られる。

A ア M ン B ボ O N

Web-lue 2009. Winter





01



02

01/交尾している
Nembrotha kubaryana。

02/のんびりしていた*Thecacera picta*。

アンボンのダイビング

前文でこの海はスゴイと言った。その理由は、これから述べよう。

アンボンは、2つの「明暗」の水中環境がある。

まずは、「明」。島の南側に広がるバンダ海では、ブルーウォーターダイビングが楽しめる。珊瑚礁やウォール(壁)があり、小物から大物まで魚の濃さがうかがえる。栄養分たっぷりのリッチな海、そして壊されていない自然に集まる魚の宝庫があちこちで見られた。ダイビング中、僕らの頭上でクジラが通って行った。

個人的に好きなポイントは、2匹のでかいマグロに出会ったフクリラ・ケーブや最初は特別なものが無いと思ってたナマ・ラトゥだったが、見た事ないウミウシや他の小物を沢山見つけた。

そして、湾内は泥地広がる「暗」。ここはマクロ好きにはたまらない場所だと思う。表現するのが難しいが、日常で例えるとショッピングモールみたいだ。店頭に並

ぶきらびやかな商品や珍しい商品といったところかな。水中で言えば、棚にはフロッグフィッシュ、ストーンフィッシュ、ウミテング、エビやカニ、隣のお店は、ウミウシ専門店。カラフルなウミウシが勢揃いしてディスプレイされてる。見た事がない変わったウミウシや定番のウミウシなどオンパレードだ。泥地なので透明度はいまひとつだが、お宝が隠れているので見つけた時の喜びは一入だ。

アイル・マニスやラハ(トワイライト・ゾーンでも知られている)のポイントは、是非潜ってもらいたい。アイル・マニス(棧橋下)には、小魚の群れがひしめきあって泳いでいて、太陽が降り注ぐと魚がキラキラ光って綺麗だ。セーフティストップしながら見られるので、少し長くストップしていたい気分になるかも知れない。ラハは、へんてこな生き物がいっぱいいる。



03

アンボンの海にはマクロ好きにはたまらない小物の宝庫が眠っている。

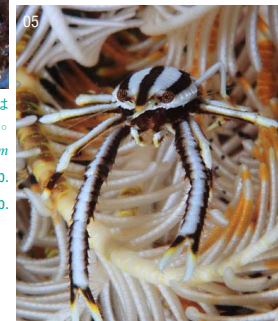
03/*Ceratosoma sinuatum*

04/*Thecacera* sp.

05/*Allogalatea* sp.



04



05

A ア M N B ボ O N N

Web-lue 2009. Winter



ミナミイジマフクロウニに生息する
コールマンシュリンブ (*Periclimenes
colemani*) のペア



04



07



08

アンボンの海は スゴイ。



01



05



09

- 05/フクリラケープの1つの出口
- 06/明るいダイブガイドたち
- 07/時にはビーチでランチを過ごす
- 08/湾の中で見つけた可愛い魚
(*Ostracion cubicus*)
- 09/砂地にいる餌を探していたカラフルな魚



02



03



06



アイルマニス (棧橋下) は
いつも魚の群れで溢れている

A ア M ン B ボ O ン N Web-lue 2009. Winter



01



02



03



04



05

01/静かなビーチでの記念撮影 02/壊されていない自然がここにある 03/無邪気な子供達の笑顔は島の宝物 04/ダイビングリゾート内にあるゲストルーム 05/リゾートの外見

最後に……

この記事を読んで少しでも興味を持った人がいたら、僕の体験した意見を付け加えておこう。
もし、ルームサービス、ナイトライフやショッピングをしたかったら、残念ながらアンボンにはない。逆に、未開の地で素朴な人と接したり、自然に触れ合ったり、レアものを探るのが好きだったら、きっとアンボンが好きになるだろう。

また、「ここは潜った、あそこも行った」と新しい場所を探し求めていたら、まだダイバーが少ないアンボンを検

討する価値は充分にあると思う。ただ、言語の問題等があるので、団体行動から外れるのが苦手な人にはお薦めしない。現在、日本人向けの環境はないに等しいのだ。ウミウシのファンだったら、こんなに多種多様のウミウシに驚くに違いない。そして、人が少ない分、好きなだけ撮影に集中出来る。

My フィッシュ、My ワールドを独占出来るアンボンはスゴイのだ。



DIVINGSERVICE & RESORT

Maluku Divers
<http://www.divingmaluku.com>



TONY WU

<http://www.tony-wu.com>
<http://www.tonywublog.com>
アンボンの写真とビデオクリップ
<http://www.vuvox.com/collage/detail/0b194b887>



うなぎマン?

ワイ村に、淡水に生きる巨大うなぎたちの世話をしているミングスさんと言うおじさんがいる。このうなぎたちは大人しく、生卵を好んで食べる。現地ガイドと一緒に行けば、ミングスさんがうなぎに会わせてくれるし、また触らせてもくれる。

僕みたいにクレージーだったら、水に入って撮影もさせてくれる。但し、覚悟が必要。この水は非常に冷たい。子供達が水遊びしてるくらいだから安心して入れる小川である。

地元の言い伝えによると、うなぎに危害を与える者には悪事が起こると言われているそうだ。



EXTRA SECTION 2

うなぎマンのこと

A ア M ン B ボ ン N

Web-lue 2009. Winter

